

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

平成30年度病虫害発生予報第7号(10月)について

このことについて、病虫害発生予報第7号を発表したので送付します。

予報第7号

チョウ目害虫の動向に注意し、適切に防除しましょう

例年9月から11月にかけては、オオタバコガやハスモンヨトウの発生が最も多くなります。本年は9月上旬以降、これらが急増している地域や、ダイズの白変葉が例年より多い地域があります。

向こう1カ月の気象予報では平年に比べ気温が高いとされており、現時点で発生が確認されないほ場でも今後、野菜や花で加害の多発が予想されます。

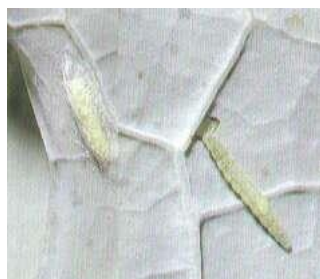
また、冬春キャベツや冬春ダイコンの定植(播種)時期でもあるので、コナガやアオムシについても発生動向に注意し、適切な防除をお願いします。



(直径0.4mm程度のまんじゅう型)



オオタバコガの老齢幼虫



コナガの蛹(左)と幼虫(右)



ハスモンヨトウの卵塊



孵化直後のハスモンヨトウの幼虫

<予想される向こう1か月の天候(平成30年9月29日~平成30年10月28日)>
期間のはじめは台風や前線、湿った空気の影響を受けやすい見込みです。向こう1か月の降水量は多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

暖かい空気が流れ込みやすく、向こう1か月の気温は高い見込みです。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間（数値は予想される出現確率）

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低20 並30 高50% 高い見込み	少10 並30 多60% 多い見込み	少40 並40 多20% 平年並か少ない見込み

（福岡管区气象台 平成30年9月27日発表抜粋）

10月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	10月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
大豆	吸実性カメムシ類	やや多	やや多	やや多
かんきつ	ミカンハダニ	やや少	やや少	やや多
かき	炭疽病	少	並	やや多
果樹共通	チャバネアオカメムシ	*やや少	—	*並
冬春イチゴ	うどんこ病	並	やや多	やや多
	炭疽病	並	やや多	やや多
	ハダニ類	少	やや少	並
冬春ナス	ミナミキイロアザミウマ	少	やや少	並

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。
それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋を総合的に判断して発生量を予想しています。

注3) 果樹共通・チャバネアオカメムシの現況は、年次変動が大きいため前年比としている。

【普通作物：大豆】

1 吸実性カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア ミナミアオカメムシの県下5か所の予察灯における5月1半旬～9月4半旬の誘殺虫数は平年より多かった(+)。

658頭（平年180頭、前年287頭）

イ 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

・ *Nezara* 属カメムシ<ミナミアオカメムシ>

10株当たり虫数 0.2頭（平年0.6頭、前年1.1頭）

発生ほ場率 36.4%（平年28.6%、前年54.5%）

・ イチモンジカメムシ

10株当たり虫数 0.2頭（平年0.0頭、前年0.0頭）

発生ほ場率 9.1%（平年7.9%、前年0.0%）

・ ホソヘリカメムシ

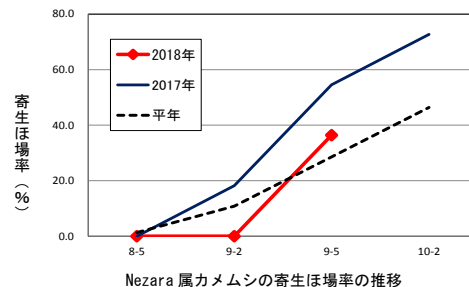
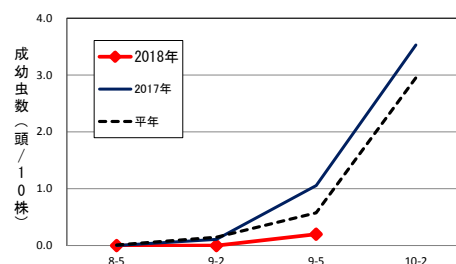
10株当たり虫数 0.0頭（平年0.1頭、前年0.0頭）

発生ほ場率 9.1%（平年14.5%、前年9.1%）

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 吸実性カメムシ類による子実被害は収穫期まで続くので、必ずほ場での発生状況の把握に努め、発生が多い場合は防除適期（9月中～下旬の開花期後30日前後）から更に7～10日後に追加防除を行う。



- 特に、夏季の生育が遅れた大豆は、開花期も遅れているので注意する。
- イ 薬剤散布を行う場合には、薬剤が着莢部によくかかるように丁寧に散布する。
なお、カメムシ類は広範囲に移動するので、広域一斉防除の効果が高い。
 - ウ ミナミアオカメムシは例年9月下旬～10月上旬にかけて発生量が急増するので、発生状況には十分注意する。
 - エ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 7の内容を確認の上適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

【果樹：かんきつ】

1 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 9月5半月調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-～±）。

寄生葉率 3.3%（平年 5.2%、前年 1.6%）

発生ほ場率 27.3%（平年 41.8%、前年 27.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（-～±）。

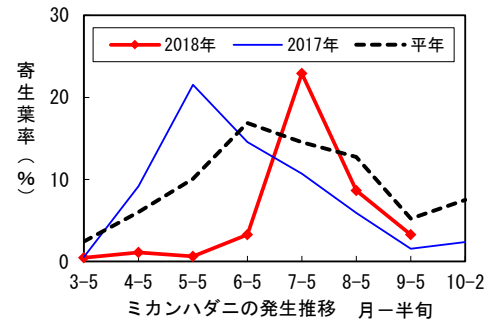
(3) 防除上注意すべき事項

ア 果実に寄生が認められる場合は、薬剤防除を実施する。

イ 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

ウ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 7の内容を確認の上適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 9月5半月調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

発病枝率 0.07%（平年 0.19%、前年 0.07%） 発生ほ場率 20%（平年 12.9%、前年 22.2%）

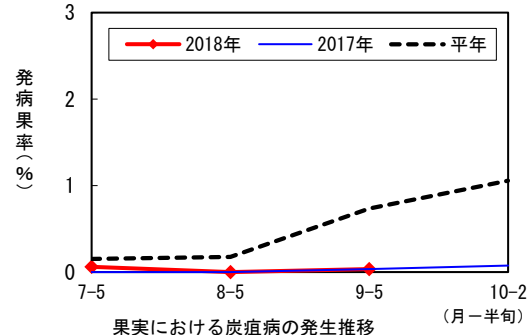
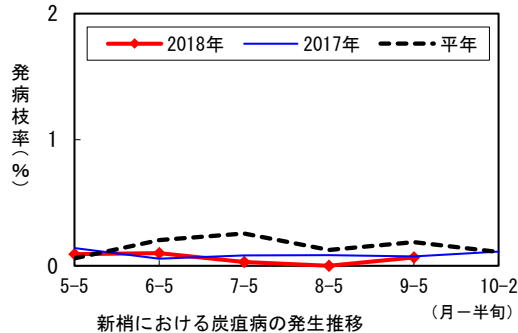
発病果率 0.03%（平年 0.73%、前年 0.03%） 発生ほ場率 10%（平年 36.2%、前年 10%）

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 連続降雨があった場合や前年の発生が多かった園では、薬剤防除を徹底する。



【果樹共通：チャバネアオカメムシ】

(1) 予報の内容

発生量：前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月1半旬～4半旬までの予察灯によるチャバネアオカメムシの合計の誘殺数は、前年よりやや少なかった（－～±）。

誘殺虫数：811頭（前年 3,488頭、前々年 1,601頭）（調査地点：筑紫野市）

67頭（前年 420頭、前々年 632頭）（調査地点：久留米市）

180頭（前年 119頭、前々年 44頭）（調査地点：朝倉市）

イ 9月1半旬～4半旬までのフェロモントラップでのチャバネアオカメムシの誘殺虫数は、前年よりやや少なかった（－～±）。

誘殺虫数：57頭（前年 255頭、前々年 112頭）（調査地点：筑紫野市）

17頭（前年 4頭、前々年 1頭）（調査地点：宗像市）

7頭（前年 27頭、前々年 6頭）（調査地点：八女市）

ウ 9月5半旬の調査の結果、果樹カメムシ類によるカキの被害程度は前年よりやや多かった（±～+）。

カキ被害果率 1.5%（前年 1.0%、前々年 0.2%）

被害果発生ほ場率 60%（前年 60%、前々年 27.3%）

エ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果樹カメムシ類の飛来状況は地域により異なる。また、同一園内でも被害発生状況は偏りがあるため、園内全体を注意して見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。

イ 果樹カメムシ類は広範囲に移動するため、薬剤散布は広域一斉防除の効果が高い。

ウ 薬剤防除の際は、収穫前日数等農薬使用基準を遵守する。

エ 降雨があると薬剤の残効が短くなるので、散布間隔に注意する。

オ 今後の発生状況については、病虫害防除所ホームページ病虫害の発生状況 (<http://www.jpnpn.ne.jp/fukuoka/doukou/hassei.html>) を参照する。

【果樹：その他の病虫害】

作物名 病虫害名	現況 発生量	10月の発生予報 発生量		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かき フジコナ カイガラムシ	多	多	多	・現在、フジコナイガラムシ第3世代の齢期は揃っていないが、農薬散布を行う場合は園内を見回り、できるだけふ化幼虫の比率が高い時期に行う。

【野菜：冬春イチゴ】

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

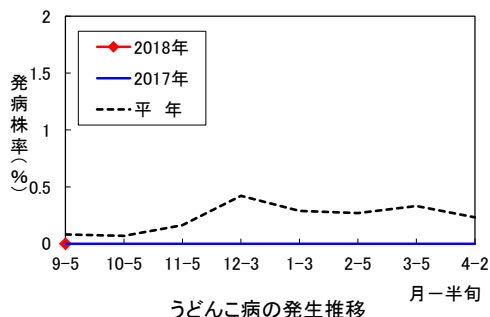
発病株率 0%（平年 0.1%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 不要な下葉は早めに除去する。防除は摘葉後に行うと効果的で、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

イ 11月までは発病が増加しやすい時期なので、定植後からビニル被覆までの時期を重点的に防除を行う。薬剤については、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p 7の内容を確認の上適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 9月5半月調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 0.05%（平年 0.1%、前年 0.2%）

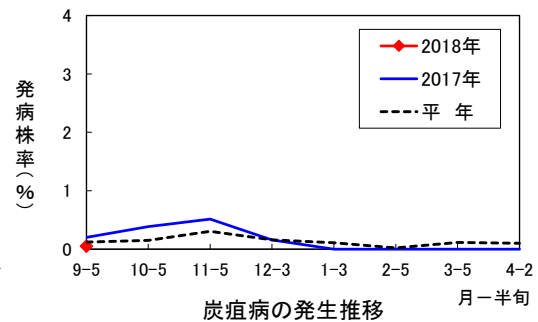
イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ビニル被覆後から発病が増加するので、発病株は速やかにほ場外へ持ち出し処分する。なお、発病株の残渣が残っていると補植した株も発病する可能性が高いので、残渣を残さないように周囲の土ごと掘り取る。

イ 하우스内の排水を図り、多湿にならないように注意する。

ウ 苗や定植株での発病が多い場合は、次年度親株用苗も感染している可能性が高い。ビニル被覆後に発生する秋ランナーから親株用の苗を採るなど、健全な親株用苗の確保に努める。



3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半月調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

寄生株率 0%（平年 2.1%、前年 2.6%）

イ 向こう1か月の気象予報では並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

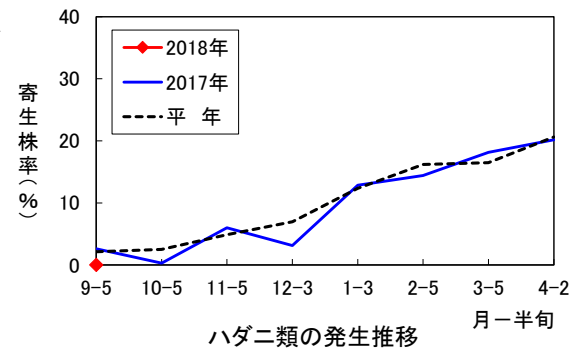
ア 本ぼではビニル被覆後に多発しやすい。多発後は防除が困難になるので、被覆までの防除を徹底し、初期密度を低下させる。

イ 抵抗性がつきやすいので、気門封鎖剤も利用し、同一系統薬剤の連用は避ける。

また、ハダニ類に登録のある薬剤の多くは浸透移行性が乏しいため、葉裏に薬液が十分付着するよう防除を行う。マルチ被覆時に摘葉した後、防除を行うと効果的である。

ウ 天敵を利用した防除を実施する場合は、天敵類への影響が長い有機リン系、カーバメート系、合成ピレスロイド系、ピラゾール系の薬剤は使用しない。

エ 親株用の苗や補植用の余り苗についても防除を怠らない。



【野菜：冬春ナス】

1 ミナキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

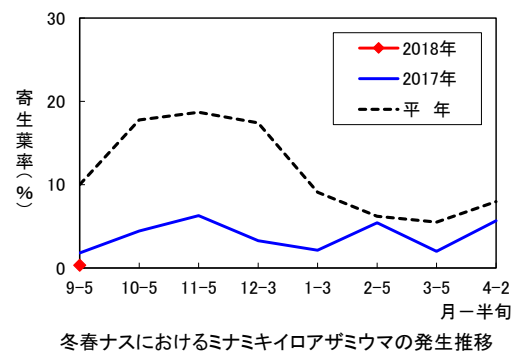
発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半月調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

発病株率 0.3%（平年 10.0%、前年 1.8%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

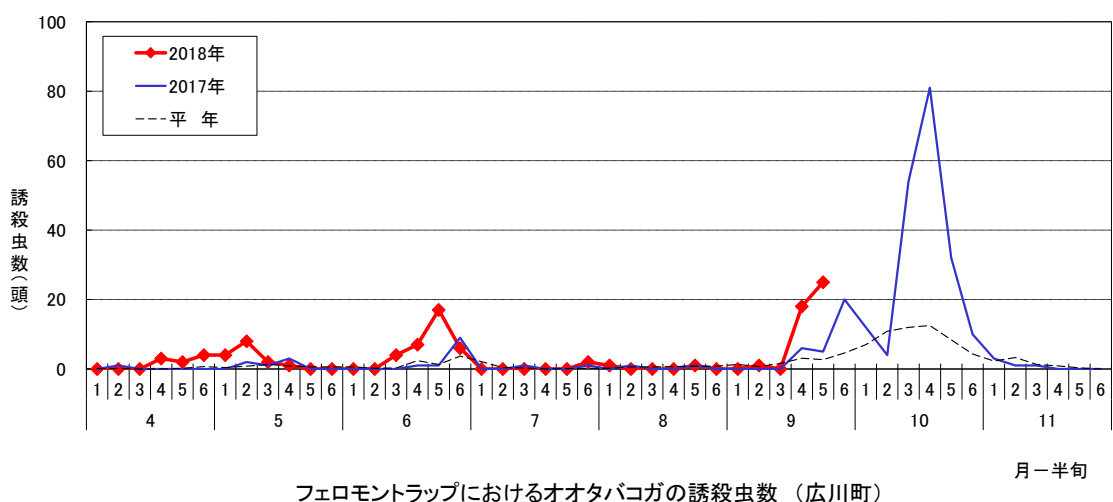
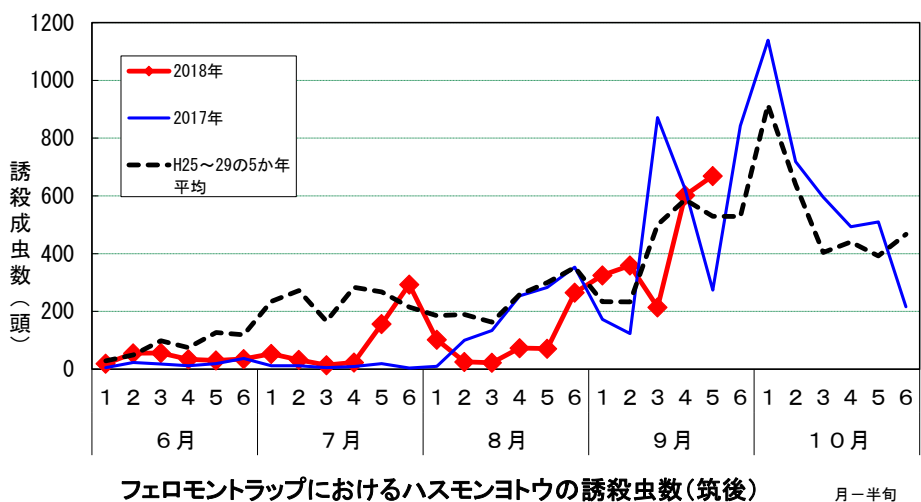


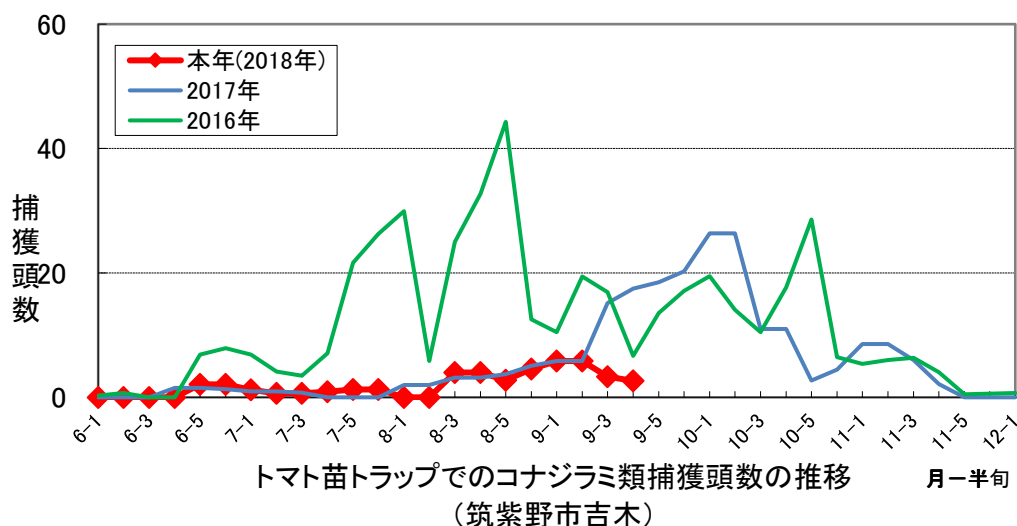
(3) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場内外の除草を徹底し、本種の増殖源を絶つ。
- イ 防虫ネット(0.4mm目合い以下)を展張し、定期的な薬剤散布を実施する。
- ウ 発生初期の防除を徹底する。
- エ 化学薬剤だけでは、アザミウマ類の防除に限界があるため、天敵を利用した総合的防除を積極的に実施する。
- オ 薬剤抵抗性の発達を回避するために、同一系統薬剤の連用は避ける。

【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	現況 発生量	10月の発生予報 発生量		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
野菜共通				<ul style="list-style-type: none"> ・以下全ての病害虫について、早期発見に努め、発生初期に薬剤防除を徹底する。 ・今後の発生状況については、地域間差があるため病害虫防除所のホームページを参照のこと。
ハスモンヨトウ	やや多	やや多	やや多	<ul style="list-style-type: none"> ・若齢幼虫は群生しているため、かすり状の葉を見つけ次第、除去・処分する。
オオタバコガ	やや多	やや多	多	<ul style="list-style-type: none"> ・薬剤防除は、若齢幼虫を対象に実施する。
コナジラミ類	—	—	やや少	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場内外の除草を徹底し、本種の増殖源を絶つ。





※平成27年（2015年）より調査のため平年値なし

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しています。
携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと、病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。



最新の病害虫発生状況